死別への適応と故人との継続する絆との関連

—故人との継続する絆の適応性における自伝的記憶のはたらき(1)—

○山中亮¹・田上恭子²

(¹名古屋市立大学大学院人間文化研究科・²愛知県立大学看護学部)

キーワード: 継続する絆, 死別体験, 適応

Adjustment to Bereavement and Continuing Bonds

Akira YAMANAKA¹ and Kyoko TAGAMI²

(¹Graduate School of Humanities and Social Sciences, Nagoya City Univ., ²School of Nursing & Health, Aichi Prefectural Univ.)

Key Words: continuing bonds, bereavement, adjustment

目 的

死別への適応に関する理論一つとして, 故人との絆を死別後も保ち続けることが死別への適応において重要であるという継続する絆(Continuing Bonds)理論が注目されている(Klass et al., 1996)。特に死別への適応・不適応と絆のありようとの関連について関心が高まっている。本研究では, 死別への適応を現在の死別反応から捉えることとし, どのような死別体験がどのように適応に影響を及ぼすのか, また死別への適応と継続する絆との関連を明らかにすることを目的とする。

方 法

1. スクリーニング調査

株式会社クロス・マーケティングのリサーチ専門データベースにモニターとして登録している一般成人の中から, 1,107名(年齢範囲 18-88 歳)を対象にスクリーニング調査を実施した。調査内容は, 性別, 年齢, 日本語版 WHO-5 精神的健康状態表(岩佐他, 2007), 大切な方との死別経験の有無, 本調査への協力意思の有無, であった。実施は同社に委託した。結果, 精神的健康状態が良好であるとされるカットオフポイント 13 点以上の者で, 死別経験があり, 本調査への協力意思がある者は 667 名であった。

2. 本調査

1) 調査対象者と手続き: スクリーニングされた 667 名から 400 名を本調査の対象とした。実施は同社に委託した。
2) 調査内容: ①死別体験の内容(a.故人との続柄, b.死別年, c.生前の故人の大切さと親密性(各 0~100), d.死別の予期, e.死別時の苦痛, f.苦痛からの回復の程度。d~fは 6 件法), ②故人との継続する絆(日本語版 Continuing Bonds Scale(以下 CBS; 中里他, 2008)を用いた。11 項目 5 件法), ③死別反応(中里(2006)による死別反応尺度を用い, 最近 2 週間の状態を尋ねた。「悲哀感と思慕」「イメージと思考の再体験」の 2 因子構造。13 項目 4 件法)。この他, 故人に関する記憶の項目が含まれた。

3. 倫理的配慮

本研究は, 名古屋市立大学人間文化研究科研究倫理審査委員会の審査・承認を受け実施された。

結 果

有効回答 390 名(男性 194 名, 女性 196 名; 平均年齢 54.65 歳, 年齢範囲 18-85 歳)を分析対象とした。

1. 死別体験が死別反応に及ぼす影響

「悲哀感と思慕」「イメージと思考の再体験」には性差, 年齢との関連は認められなかった。故人との続柄について, 回答の多かった上位 3 つ(親, 祖父母, 配偶者・パートナー; $N=340$)の間で下位尺度得点をそれぞれ比較したところ有意な主効果が認められ($F(2,337)=4.96, MSe=36.88, p<.01, \eta^2=.03$; $F(2,337)=5.07, MSe=26.74, p<.01, \eta^2=.03$), 配偶者・パートナーとの死別者は親及び祖父母との死別者より死別反応が高かった($p<.05$)。

その他の死別体験内容に関する変数との相関を求めたところ, 「悲哀感と思慕」と経過年以外の変数との間で有意な相関

が認められた($r=.13-44, ps<.05$)。「イメージと思考の再体験」は, すべての変数との相関が有意であった($r=.11-38, ps<.05$)。

2. 死別反応と故人との継続する絆との関連

変数間の相関を求めたところ, 「悲哀感と思慕」「イメージと思考の再体験」と CBS 得点との間にはともに有意な正の相関が認められた($r=.53, r=.39, ps<.001$)。

3. 死別体験と故人との継続する絆との関連

変数間の相関を求めたところ, 「生前の故人の大切さ」「生前の故人との親密さ」「死別時の苦痛」と CBS 得点とに有意な正の相関が認められた($r=.27, r=.31, r=.38, ps<.001$)。また「回復の程度」と CBS 得点との間に有意な負の相関が認められた($r=-.26, p<.001$)。

4. 死別体験が死別反応に及ぼす影響における故人との継続する絆の間接効果の検討

独立変数を死別体験の各変数, 従属変数を死別反応の 2 下位尺度, 媒介変数を CBS 得点として, 統計分析ソフト HAD(清水, 2016)を用いて媒介分析を行った。死別体験については, 関連の見られた「続柄」「生前の故人の大切さ」「生前の故人との親密さ」「死別時の苦痛」「回復の程度」を検討した。Bootstrap 法(サンプリング回数 2,000)を用いて間接効果を検討したところ, 死別反応 2 下位尺度いずれにおいても, 「続柄」以外全てで CBS の間接効果が有意だった($ps<.001$)。なお「回復の程度」からの直接効果については, 有意性を保っていた。

考 察

本研究の結果から, 死別体験の特徴が現在の死別反応に及ぼす影響については, 故人との継続する絆の強さが媒介していることが明らかとなった。すなわち, 精神的健康状態が良好な者では, 絆を強く感じていると死別反応を強めると考えられ, 必ずしも故人との継続する絆が死別への適応を高めるわけではないことが示唆される。

引用文献

岩佐 一他 (2007). 日本語版「WHO-5 精神的健康状態表」の信頼性ならびに妥当性—地域高齢者を対象とした検討— 厚生生の指標, 54, 48-55.

Klass, D., et al. (1996). *Continuing bonds: New understandings of grief*. New York: Taylor & Francis.

中里 和弘 (2006). 青年期における祖父母との死別に関する研究(第 1 報)—祖父母の死に対する認識と死別反応についての検討— 生老病死の行動科学, 11, 11-20.

中里 和弘他 (2008). 日本語版 Continuing Bonds Scale (「故人との絆の継続」評価尺度)の作成 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 376.

清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

謝 辞

本研究は科研費(課題番号 26380935)の助成を受けた。